

# 和泉式部日記の心情表現をめぐって

— 文体觀察の一視点 —

田 中 瑩 一

一

本稿で心情表現と仮称するのは、和泉式部日記で言えば、たとえば次の傍線部のような表現をさしている。

1……………と聞えても、あやしかりける身のありさまかな、故宮のさばかりの給はせしものをとかなしくて、おもひみだるゝほどにれの童来たり。御文やあらんと思ふほどに、さもあらぬを心う

しとおもふほども、すきくしや。  
(402頁) 注1

「かな」「ん」など、辞に属するものは今は考察の直接対象としない。傍線の他にも、(イ)「あやしかりける身」、(ロ)「おもひみだるゝ」、(ハ)「心うし」などは心情表現だが、やや性質を異にする。(イ)は連体修飾となって「身」に吸収されているし、(ロ)は心情を反映する動作が動詞の形で表現されている。また、(ハ)は「……………」で引用される直接叙法の内部のことばである。つまりこれらは傍線部に比べてより間接的な表現と言える。傍線を付したものの中でも「思ふ」は心理の、動詞による表現だが、同じ動詞による表現でも「おもひみだるゝ」のように事態の抽象化がなされないで、「思ふ」内容の直接引用を前提と

している点が異なっている。

二

和泉式部日記が、日記文学としては特殊な性格を持ち、むしろ「物語」に近いことは、古来「和泉式部物語」とも呼ばれて来たこととあわせて、今日まで注目されて来ているところである。にもかかわらず、奥書の問題をはじめ外部標徴を中心に見るにしろ、文体觀察を中心に内部標徴から見ると、ことは他作説、自作説にかかわって、この日記の特質のとらえ方をめぐっては依然決着しかねる面を残している。たしかに、われわれが平安朝の日記文学を読みくだって和泉式部日記に至ると、そこにスタイルの差を感じることは否めないものであって、小稿も又、その文体的な異和感に考察の発端を持つ。

たとえば「かなし」という心情的形容詞は、和泉式部日記の地の文では五例使われていて(書簡中の用例を除けば四例)、先にあげた例文1の他、次の通りである。

2……………石山にゆきたれば、仏の御まへにはあらで、ふるさとのみ恋しくて、かゝる歩もひきかへたる身のありさまと思ふに、いと

ものがなしく、まめやかに仏を念じたてまつるほどに、高欄のしものかたに人けはひのすれば、あやしくて見おろしたれば、この董なり。  
(416頁)

3 あはれに、なに事も聞しめしうとまぬ御ありさまなれば、心のほども御覽ぜられんとてこそ思ひもたて、かくては本意のまゝにもなりぬばかりぞかしと思ふにかなしく、物も聞えて、つくづくとなく気色を御覽じて

なをざりのあらましごと夜もすがら

とのたまはずれば

おつる涙は雨とこそふれ

(439頁)

4 風に心ぐるしげにうちなびきたるには、たゞ今も消えぬべき露のわが身ぞあやうく、草葉につけてかなしままに、おくへも入らでやがて端にふしたれば、つゆねらるべくもあらず。(手習ひのやうに書きたる文の中)  
(420頁)

5 ……をこなるめを見るべかめるかなと思ふにかなしく、御返聞えんものとおぼえず。  
(433頁)

いずれも文の途中に使われ、本人または他人の動作が後続する。つまり「かなし」という心情表現は、動作の叙述の中に埋もれてなされ、各文の主意は、心情の表現によりは、人物の動作の叙述にあるということが出来る。

一方、かげろふ日記におけるこの語の使われ方を見ると、

6 みるべき人、みよとなめり、ときへおもふに、いみじうかなしくて、ありつるやうにおきて、とばかりあるほどに、ものしためり。

(上・115頁)

のように途中に来るもの他、

7 ありしことどもおもひいづるに、いとゞいみじうあはれにかなし。  
(上・146頁)

(上・146頁)

8 二なく思ふ人をも、人めによりてとゞめをきてしかば、ゐてはなれたるつるでに、しぬるたばかりをもせばやと思ふには、まづこのほだしおぼえてこひしうかなし。  
(中・203頁)

(中・203頁)

9 あはれ、おのことで、ようおこなひたりけるよとみきくもかなし。  
(下・274頁)

(下・274頁)

のように、文の終末に来るものが多く見られる。(前者八例に対して後者十二例)<sup>注2</sup> 文の終末が心情表現であるということは、その文の主旨が心情の表現にあることを示している。

かつて渡辺実氏は、「いづれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひける中に、いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。」<sup>注3</sup> という源氏物語冒頭の一文について次のように述べられた。

主人公桐壺更衣の紹介にあてられた文ではあるが、他に多数の後達が届られたこと、桐壺更衣の身分は決して高いものではなかったこと、なども併せ述べられてゐる。一度に多くのことを語らうとする欲ばった書き方だが、一方は「中」といふ語の修飾語として、他の一方は格助詞「が」によって「すぐれて時めき給ふ」の主語として、いずれも述語としての機能を果たしたあとは、最後の述語「ありけり」で統一される叙述の構成要素、乃至はそれ以下の単位として処理されてしまふことに注意せねばならない。(中略) 二つ以上の

ことが言ひたいのだが、やはりその中の一つだけが今言はうとする事を中心である。

文体觀察にとつてこの着眼は貴重だと思ふ。和泉式部日記に一例も見られなかつた「かなし」を文末におく構文が、かげろふ日記に多いという事実は、自己告白性の強いかげろふ日記の文体の一面を語っている。そこで一般に、心情表現が文の途中に来るか終末に来るかという違いが、文章の性格の差を反映しているのではあるまいかという予想を抱かせられるのである。

大橋清次氏は、平安朝日記、物語の心情表現、特に「思ふ」の用例を調査し、「思ふ」を文末に持つ用例が物語にはほとんどないのに日記にはあること、文中での用法をみても物語には、和泉式部日記のよくな内省的・主観的心情表現がみあたらぬことなどをあげて、「主観的心情表現、自己告白的表現を日記文学の一つの特色と言つてもよいのではないか」と述べられた。<sup>注4</sup>

また、西尾光雄氏は「……とおぼゆ」「……と見ゆ」等の客観的手法に比して、「自己の感情を直接にうちつけに表出する」「心理的感情的形容詞によつて文章をとじる形式」をかげろふ日記と源氏物語とによつて調査され、前者にその用法が多いことなどを明らかにされた後、「日記では、作者の心理感情が直接これらの形容詞によつて表出されるのに対し、物語ではこれらの内容を形容詞によつてあらわす場合には、登場人物の心理としてあらわすか、あるいは、作者の特殊の位置から作中の事件行為に対して、感想批評として述べるかの場合に行なわれるのである。」と結論された。<sup>注5</sup>

両氏ともに、「物語」の文体と「日記」の文体との性格の差という

和泉式部日記の心情表現をめぐつて(田中)

ところに着目されての発言であるので、小稿の文脈に直接つながらないうが、文末の(渡辺実氏の用語で言へば、そこに「統叙・陳述」という構文的職能が託されている)心情表現と、文中の(同じく構文的職能「展叙」(あるいは「統叙」と「再展叙」)の託されている)心情表現とをごちゃ混ぜにしてその量の多寡を計ることにとどまれば、文体の觀察として大まかに過ぎよう。

阪倉篤義氏は「陳述」(渡辺実氏のいわゆる「統叙」「陳述」を共に含む広い意味で用いられたとみられる)はラング的な文に文としての統一をあたえるものであつて(そこまでが文法論の守備範囲だと言ふ)、文体を決定するものとしてはこれとは別に「意図性」を考へる必要があると言われた。<sup>注7</sup>ここで「統叙・陳述」を伴うか否かを文体の問題とかかわらせて言うのは、心情表現が文中に来ることと文末に来ることが、阪倉氏のいわゆる「意図性」の差を反映していると考えらるからである。

ものにおそはるる心地して驚き給へれば、火も消えにけり。うたて思さるれば太刀を引き抜きてうち置き給ひて右近を起し給ふ。これも恐ろしと思ひたるさまにてまゐり寄れり(「源氏物語」夕顔) 右の傍線部の表現を「消えにけるを」「起し給ふに」という表現に変えた場合の相違については渡辺実氏の明快な解明があるが、<sup>注8</sup>これら二者の表現の間に「意図性」の変動が見られることを見ても、上述の点はうなずけるように思ふ。

大橋・西尾両氏は「作品中から文体素をとりだして、その数量的、統計的操作によつて作者の傾向を求めようとする方法」<sup>注9</sup>に立つが、同じく心情表現を扱つても上坂信男氏のような叙述視点についての考察<sup>注10</sup>

和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

や、木村正中氏や野村精一氏らのような、作者の意識の面からの追求などは、いわゆる文学的文体論の方法と呼ばれるものであろう。その際根来司氏がみごとに実証されたように、文法研究の成果が文体の観察に鋭く切り込んで行くものだとするれば、小稿が扱おうとする文章表現上の一つの現象は、その文章論的な検討が深まることによつて文体としての意味が把握できる筈である。

たとえば次の文章(甲)に關して、

A  
B  
イ  
ロ  
ハ

(甲) 雨が降った。そして風も吹いて来たので、出発をみあわせた文章論上、A、B二文の連接が問題となるが、市川考氏は、これらの連関を、「格関係としてではなく(すなわち文の統一に關連した問題としてではなく)、節相互の間に見られる意味分節に即して具体的に理解」するために、「(イ+ロ)+(ハ)」という風に考えることの有効性を述べられた。<sup>注14</sup>が、この見方をそのまま移して考えると、分節相互の關係に、たとえば次のような文(乙)との差異がとらえられないことになる。

(乙) 雨が降り、そして風も吹いて来たので、出発をみあわせた。

なぜなら(乙)もまた(甲)と同様に、「(イ+ロ)+(ハ)」となるからである。このあたりにも文論と文章論とのかわりあう重要な問題があり、構文に文体素を求めようとする場合はいっそう、文章論がこういう問題の解明にまで射程を延ばしてくれることが望まれる。今はと

りあえず、意味分節を格関係から全く切り離して考えることの行きつまりを打開するために、(甲)のイと(乙)のイとの差を、前者が「統叙・陳述」を伴う表現であるのに対し、後者が「展叙(再展叙)」を含むのみであつて、(乙)のハに随伴する「統叙・陳述」に包み込まれる表現であるという点に見て、そこに考察の手がかりを得たいと思ふのである。

### 三

平安朝日記文学を中心に心情表現を観察し、次の二種六類をとりあげた。

I 心情表現が文末にあるもの。

A 心情表現の形容詞、形容動詞が文末にあるもの。

B 「……………と思ふ」又はその類義語が文末にあるもの。

C 「……………とおぼゆ」又はその類義語が文末にあるもの。

II 心情表現が文の途中にあるもの。

D 心情表現の形容詞、形容動詞が文の途中にあるもの。

E 「……………と思ふ」又はその類義語が文の途中にあるもの。

F 「……………とおぼゆ」又はその類義語が文の途中にあるもの。

それぞれの例。

A 10 とうかあまりなれば、つきおもしろし。(土左日記38頁)

11 ことは天下にくき人ありとも、おもひなほらましなど、

しめりておもへば、いとこころやすし。(かげろふ日記254頁)

12 秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有様、いはむかたなく

和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

- をかし。  
(紫式部日記44頁)
- 13 たゞ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。  
(更級日記53頁)
- 14 ……れいのつれづれなぐさめてすぐぞいとほかなきや。  
(和泉式部日記44頁)
- 15 その院の桜ことにおもしろし。  
(伊勢物語82段159頁)
- 16 うせたまひて後かの院をみるにいとあはれなり。  
(大和物語72段265頁)
- B 17 かくおもへば、ふなこかちとりはふなうたうたひて、なにもおもへらず。  
(土左日記36頁)
- 18 かゝるほどに、はらひのほども、すぎぬらん、たなばたは明日ばかりと思ふ。  
(かげろふ日記上137頁)
- 19 ……あなごとごとしと、いとどかゝる有様むつかしう思ひ侍りしか。  
(紫式部日記475頁)
- 20 ……「法華経五巻をとくならへ」といふと見れど、人にも語らず、ならばむとも思ひかけず。  
(更級日記493頁)
- 21 ……おなじ心にまだねざりける人かな。誰ならん。と思ふ。  
(和泉式部日記419頁)
- 22 いは木にしあらねば、心苦しとや思ひけん、やうくあはれと思ひけり。  
(伊勢物語96段168頁)
- 23 さて後又も召さざりければ、かぎりなく心憂しとおもひけり。  
(大和物語150段322頁)
- C 24 このあるじの、またあるじのよきみるに、うたておもほゆ。  
(土左日記57頁)
- 25 山科にて、明けはなるゝにぞ、いとけむせうなる心ちすれば、あれか人かにおぼゆる。  
(かげろふ日記中200頁)
- 26 物よりさし歩みて出でおはしたるも、わづらはしう心づかひせらるゝ心地す。  
(紫式部日記486頁)
- 27 ……いといみじうわびしく恐ろしうて夜をあかすほど千年を過ぐす心地す。  
(更級日記525頁)
- 28 これにつけても我が身はづかしうおぼゆ。  
(和泉式部日記444頁)
- 29 さすがにいとこひしうおぼえけり。  
(大和物語105段285頁)
- D 30 ……あかつきづくよいとおもしろければ、ふねをいだしてこぎゆく。  
(土左日記40頁)
- 31 ……おもひけることどもを、人やきくらんともおもはず、のゝしり申をきくもあはれにて、たゞなみだのみぞこぼるゝ。  
(かげろふ日記上167頁)
- 32 ……など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、をさなしと人のあなづりきこゆるこそあしけれと、はづかしげに見ゆ。  
(紫式部日記445頁)
- 33 ゆふざり立ち渡りて、いみじうをかしければ、朝寝などもせず。  
(更級日記480頁)
- 34 ……高欄のしものかたに人けはひのすれば、あやしくて見おろしたれば、この童なり。  
(和泉式部日記416頁)

和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

35 をとこ、いとかなしくて、寝ずなりにけり。

(伊勢物語 69段 151頁)

36 これを見て、かぎりなくかなしくてなむ泣きける。

(大和物語 4段 234頁)

E 37 ……このうたよしにはあらねど、げにとおもひて、ひと

く、わすれず。

(土左日記 37頁)

38 いかなるにかあらんとおもふほどに、かういふ人、あまたあ  
なりときく、さてなるべし。

(かげろふ日記下 326頁)

39 ……なにか、あざれがましと思へばはなたず。

(紫式部日記 468頁)

40 ……心の内に恋しくあはれ也と思ひつゝ、しのび音をのみ  
泣きて、その年もかへりぬ。

(更級日記 491頁)

41 ……野分だちて雨などふるに、つねよりももの心ぼそくて  
ながむるに、御文あり。

(和泉式部日記 418頁)

42 おとこ、こと心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて、  
前裁の中にかくれるて……河内へもいかずなりにけり。

(伊勢物語 23段 127頁)

43 この妻にしたがふにやありけむ、らうたしとおもひながらえ  
とゞめず。

(大和物語 64段 260頁)

F 44 かのくにひと、きゝしるまじくおもほえたれども、このこ  
ゝろを、をとこもじに、さまをかきいだして……いとおも

ひのほかになんめでける。

(土左日記 42頁)

45 ……とおぼえて、いみじうなかるれば、人にもいはでやみ

ぬ。

46 ……身のありさまの夢のやうに思ひつゞけられて、あるま

じきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とま  
ることも例のなかりけり。

(紫式部日記 480頁)

47 紫のゆかりを見て、つゞきの見まほしくおぼゆれど、人かた  
らひなどもえせず。

(更級日記 492頁)

48 あやしき御車にておはしまして、「かくなむ」と言はせたま  
へれば、女いとびなき心ちすれど、「なし」と聞えさすべき

にもあらず。

(和泉式部日記 401頁)

49 祓へけるまゝに、いとゞかなしきこと数まさりて、ありしよ  
りけに恋しくのみおぼえければ「……(歌)……」とい  
ひてなんいける。

(伊勢物語 65段 148頁)

50 夜昼心にかゝりておぼえ給ひつゝ、恋しくわびしうおぼえ給  
ひけり。

(大和物語 150段 322頁)

各作品における用例の分布状況を表にまとめれば第一表の通りであ  
る。

まず A 欄を見ると、和泉式部日記を境に、パーセンテージが大きく  
動いていることが目につく。和泉式部日記では、心情を形容詞や形容  
動詞によって直接、露骨に表現することが他の日記に比して著しく少  
なく、むしろ伊勢物語、大和物語の比率に近い。これが、平安朝の日  
記文学の中で、和泉式部日記の文章に感ずるわれわれの異和感の一つ  
の原因ではなからうか。池田亀鑑氏が、和泉式部日記を歌物語のひとつ  
と考<sup>注15</sup>えていられたことが思いあわされる。

第一表

項目	作品	土左記		かげろふ日記								紫式部記		更日記		和泉式部記		伊勢物語		大和物語	
		上		中		下		計		日		級		日		物		物			
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
終末にあるもの	A形容	20	40.0	26	19.5	53	19.2	42	26.4	121	21.3	66	47.1	43	29.9	11	5.4	9	10.1	14	8.3
	B思ふ	5	10.0	6	4.5	18	6.5	19	11.9	43	7.6	4	2.9	4	2.8	22	10.9	10	11.2	39	23.2
	Cおぼゆ	3	6.0	16	12.0	28	10.1	18	11.3	62	10.9	15	10.7	15	10.4	9	4.5	0	0	5	3.0
	小計	28	56.0	48	36.1	99	35.9	79	49.7	226	39.8	85	60.7	62	43.1	42	20.8	19	21.3	58	34.5
途中にあるもの	D形容	13	26.0	24	18.0	25	9.1	25	15.7	74	13.0	20	14.3	33	22.9	34	16.8	12	13.5	23	13.7
	E思ふ	8	16.0	52	39.1	119	43.1	40	25.2	211	37.1	28	20.0	33	22.9	106	52.5	49	55.1	74	44.0
	Fおぼゆ	1	2.0	9	6.8	33	12.0	15	9.4	57	10.0	7	5.0	16	11.1	20	9.9	9	10.1	13	7.7
	小計	22	44.0	85	63.9	177	64.1	80	50.3	342	60.2	55	39.3	82	56.9	160	79.2	70	78.7	110	65.5
総計		50		133		276		159		568		140		144		202		89		168	

和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

ところで今、この表を資料の一つとして和泉式部日記の心情表現の特性を考える場合、A型の表現を中心としながらも他の表現型との関連の上に考察をすゝめるのが妥当であろうと思うので、その観点から、とりあえず四項だけをとりあげて考えておきたい。

I 露出形と被覆形

(1) (A) 対 (D)

まず形容詞、形容動詞による心情表現の傾向をみると、一般に日記文学ではA型(終末表現)が多い。伊勢物語・大和物語ではこの比が逆転するが、和泉式部日記はこの点、歌物語の文章の傾向に類似している。

第二表

D (%)	A (%)	項目	作品
39.4	60.6	日土記左	
37.9	62.1	ふかげろ日記	
23.3	76.7	日紫式部記	
43.4	56.6	日更日記	
75.6	24.4	部和泉式部記	
57.1	42.9	物伊勢物語	
62.2	37.8	物大和物語	

51 ありしこともおもひいづるに、いとどいみじうあはれにかなし。(かげろふ日記上146頁)

のように、主観的心情を表白する文にくらべて、

52 これを見て、かぎりなくかなしくてなむ泣きける。

(大和物語4段234頁)

のような文を見ると、表現の主旨は「泣きける」にあり、「かなしくて」はその「泣きける」に包まれて述べられていることが明白である。

和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

主観的心情を直接に表白するのが日記の文体であり、登場人物の動作を中心に叙述をすゝめるのが物語の文体であることは諸氏の考察のあるところである。<sup>注16</sup>

(2) (A+B+C) 対 (D+E+F)

次に、「……………と思ふ」「……………とおぼゆ」などの表現をあわせて、こゝにいう心情表現が文末にある場合と文中にある場合との差を考えてみる。その比率は第一表の小計欄で見ることが出来る。

土左日記と紫式部日記を除けば全体に途中型が多いが、その比が、和泉式部日記で激増する。(A) 対 (D) の比で見たと同様に、こゝからも和泉式部日記の文体が日記文学の中にあつては特異なものであることをうかがうことができる。

以上二項は、心情表現が文末にあつて露出している場合と、文中にあつて他の、主として動作の表現に包まれている場合との差に着目したのであつて、露出形を日記文学の文章の特性に、被覆形を(歌)物語の文章の特性に擬して見たのである。

II 緩叙形と直叙形

(1) (A) 対 (B+C)

西尾光雄氏は、主観的心理的内容を、「……………と思ふ」……………と

第三表

B+C (%)	A (%)	項目	作品
28.6	71.4	日土記左	
46.5	53.5	ふかげろ日記	
22.4	77.6	紫式部日記	
30.6	69.4	日更記級	
73.8	26.2	部和泉式部日記	
52.6	47.4	物伊勢語勢	
75.9	24.1	物大語和	

ひとりごつ』等の客観的記述をしないで、直接に作者自身の感情を地の文として表現するところに日記としての方法を有する」と言われたが、<sup>注17</sup>右の表の数字を見ても日記文学の文章にA型の多いことが納得できる。伊勢物語は「……………おぼゆ」の表現が一例もないのでやゝ特殊だが、こゝでも又、和泉式部日記が、(歌)物語の文章の傾向に類似していることが認められるのである。

(2) (A+C) 対その他の心情表現

たゞしその際、「情意形容詞」の終止法が、一般に言われているほど「切れ味よくきびとくした表現」でも、「感情をなまのまのまゝ停滞なく表出」したものでないという根来司氏の指摘に注目する必要がある。<sup>注18</sup>たとえば、「雨など降るもをかし。(枕草子、春は曙)」のような表現は枕草子に多いが、すべて対象語がガ格をとつて「をかしくおぼゆ」の意味を含み、ヲ格をとる「をかしと思ふ」の例は皆無である。氏はこれを感情の「低徊的、緩徐的表現」と呼ばれた。

そこで、(A)に実は(C)の意味が含まれているとすれば、(A+C)とそれ以外の心情表現との比を見ることが必要になってくる。第四表である。案の定、和泉式部日記以下が著しく異質で、この数字

第四表

その他 (%)	A+C (%)	項目	作品
54.0	46.0	日土記左	
67.8	32.2	ふかげろ日記	
42.1	57.9	紫式部日記	
59.7	40.3	日更記級	
90.1	9.9	部和泉式部日記	
89.9	10.1	物伊勢語勢	
88.7	11.3	物大語和	

も又、これまでに見て来たような、この日記の文章の特殊な性格を示していることがわかるのである。

これに対してヲ格をとって「………思ふ」を含む用法は、直接的でたゞみかける表現である。そしてそれは、

53 新しうかよふ婿の君などの内裏へまるるほどをも心もとなう、所につけてわれはと思ひたる女房の、のぞき、けしきばみ、奥の方たたくずまふを、前にゐたる人は心得て笑ふを、「あなかま」とまねき制すれども、女はた知らず顔にておほどかにてゐ給へり。

(「枕草子」 正月一日は 45頁)

の例のように、情意性形容詞を終止法以外に用いる時に表われることがあると根来氏は言われる。つまり(A)は(C)に親近性があり、(B)は(D)に親近性があるということになる。この比も又、和泉式部日記のところで大きく逆転する。

#### 第五表

B+D (%)	A+C (%)	項目 作品
43.9	56.1	日土 記左
39.0	61.0	ふかげろ 日記
22.9	77.1	紫式部 日記
38.9	61.1	日更 記級
73.7	26.3	部和泉 日記式
71.0	29.0	物伊 語勢
76.5	23.5	物大 語和

以上、日記文学の文章は緩叙的で、(歌)物語の文章は直叙的な傾向を持つことを述べ、和泉式部日記の文章がむしろ後者の傾向に近いものを示すことを指摘した。それは早く、第一表のB欄とC欄との差を見ただけでも予想されることであった。BとCとの差を見ると、

和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

「土左日記」が「かげろふ日記」「紫式部日記」「更級日記」と異なる傾向をみせているのが暗示的であるが、改めて考えてみたい。——なおついでに言えば、かげろふ日記上・中・下それぞれの差や、和泉式部日記一、二、三部それぞれの差などについては、今回の私のデータからは特に指摘すべき相違点が見出せなかつた。

以上ごく荒い観察であるが、これらの項目から推察する限り、和泉式部日記の文体に、日記よりは歌物語に近い面のあることは否定できないものと考ええる。他の面から日記としての性格も数多く指摘されていることであり、もちろんこれをもって他作説にくみしようとするものではないが、前記池田亀鑑氏の発言の他、「文章の系統は『蜻蛉』からひき『源氏』に流れ入つてゐる。」と言われる岡一男氏や、「作り日記の性質に根ぎしながら、作り物語の特色を含む」と言われる小西甚一氏らの説に、別の角度から照明をあて、文学作品としての和泉式部日記の方法について、その一面を見ることができたと思うのである。

注 1、例文の引用並びに用例数の調査は、「日本古典文学大系」による。

2、「あはれにかなしくやおぼゆる。(中)」のようなものはとらなかつた。連用修飾として「おぼゆる」に吸収されていると見るからである。

3、渡辺実「仮名文の初期——きり方、つなぎ方の文章法を中心に——」

(「国語国文」S 31・11)

4、大橋清次「和泉式部日記の研究」四八六頁。

5、西尾光雄『日本文学史の研究』(中古篇)二六三頁。

## 和泉式部日記の心情表現をめぐって(田中)

- 6、渡辺実「構文的職能——語の認定・文の特質——」(『国語学』63輯)
- 7、阪倉篤義「文法論と文体論のあひだ」(『国語学』52輯)
- 8、渡辺実「平安文章史上の源氏物語」(『文学』S 42・5)
- 9、西尾光雄前掲書六三二頁。
- 10、上坂信男「和泉式部日記をめぐって」(『物語序説』)
- 11、木村正中「蜻蛉日記下巻における物語性の文体論的考察」(『文学・語学』四五号)
- 12、野村精一「蜻蛉の終焉・再説」(『源氏物語の創造』)
- 13、根来司『平安朝女流文学の文章の研究』
- 14、市川考「文と文章論」(『ことばの研究』I)
- 15、池田龜鑑『日本文学教養講座・物語文学』『日本文学講座(河出書房版) 古代の文学後期』ほか。
- 16、西尾光雄、木村正中前掲書の他、清水好子「物語の文体」(『国語国文』S 24・9) など。
- 17、西尾光雄前掲書二〇五頁。
- 18、根来司前掲書。
- 19、岡一男氏は、かげろふ日記上巻は歌物語的であり、中巻は日記的、下巻は物語的であると言われる。(『蜻蛉日記の成立年代とその芸術構成』)
- 20、織田裕子氏は和泉式部日記九月末までを第一部、十二月十八日までを第二部、以下を第三部と見、第一部には客観度の高い表現が、第二部には宮の心中をのべる表現が、第三部には外的環境を客観的に述べる表現が多いと言われた。(『和泉式部日記の作者について』(『国語国文』S 33・4)
- 21、岡一男「和泉式部日記の研究」(『古典と作家』)
- 22、小西甚一「分析批評のあらまし」(『解釈と鑑賞』S 42・5)